

湖南省における家庭教育支援の取組

■家庭教育を取り巻く現状

核家族化や地域社会のつながりの希薄化により、子育ての悩みや不安を抱えたまま孤立してしまう保護者が増えている。また、ひとり親家庭の増加や貧困など家庭教育の充実に難しさのある中で、学校生活に適應できない子どもが増えている。このように保護者の困り感が子どもたちに影響している現状がある。

■家庭教育支援で目指す姿（課題解決のために・・・）

子育ての支援を必要とする保護者が、地域をはじめとした様々な人とつながることで、子育てに対する不安感を和らげ、ひいては子どもの育ちを豊かにすることができるような体制づくりが求められる。家庭教育の自主性を尊重しつつ、不安を抱える保護者への情報提供や学習の機会の設定などのアプローチ、さらに助けを求めることが難しい保護者へ支援を届けるアウトリーチの取組が期待される。

■本年度の活動

（１）家庭教育支援員連絡会議の開催

- ・ 8月25日（金）県SWSV上村氏、県生涯学習課社会教育主事桂氏にお越しいただいて開催。関係各校から家庭教育支援員、校長が参加して、取組概要の報告、情報交換を行った。両氏からのご講話に、参加者一同学びを深め、明日からまたやってみようという元気をいただいた。

（２）中学校区別運営会議の開催

- ・ 4中学校区別に、地域学校協働活動推進員、家庭教育支援員、管理職、市教委担当者が出席し、今年度これまでの取り組んできたことの成果と課題を出し合った。

（３）家庭教育支援チームによる活動

- ・ 本市では5小学校と2中学校7チームに7名（延べ10名）の家庭教育支援員が携わっている。各校の状況に応じて「訪問型支援」や保護者が気軽に集まり、つながるきっかけをつくる「子育てサロン」、不安を抱える保護者の学びの場となる「子育て講演会」の開催等、工夫を凝らした活動を展開している。

■訪問型家庭教育支援の実践内容

「訪問型支援」に積極的に取り組んでいるチームでは以下のような内容で実践を進めている。

- 子どもや保護者と丁寧に信頼関係を築いたスタッフが担当の児童・生徒宅を訪問。
- 個々の状況に応じたアプローチを継続的に進める。
- ケース会議に参加し、学校関係者と情報を共有。

■本年度の成果

8月に行った連絡会議に、家庭教育支援員とともに管理職が参加したことで、改めて校内での連携の大切さを考える機会となった。また、各チームではその学校や児童生徒の状況によりそれぞれに取組を工夫しているが、情報共有により学校間の連携も生まれた。さらに県SWSV上村氏よりすべての家庭教育支援員にエールをいただくことができ、次につながる充実した研修の機会となった。

各校での成果を受けて、この事業に新たに組みたいという学校が増えつつある。

■今後の課題

各チームにおける家庭教育支援員と学校、関係機関との緻密な情報共有、連携が必要。それぞれの役割を明確にしたうえで、子どもたちや保護者の支援にあたることが大切である。本市では、目指すべきモデルとなる「訪問型支援」を展開しているチームがあることが強みである。今後はこれらの取組を参考にしながら、よりよい家庭教育支援の在り方を市レベルで考え、一貫した取組を行うための仕組みづくりを行っていくことが必要である。

報告書記入者（学校教育課・教育研究所長）

ゆっくりゆっくりの子育て ～9年間の子育て応援～

湖南省	本事業開始年度	令和4年度
活動内容		
<input type="checkbox"/> 地域人材の養成 <input type="checkbox"/> 家庭教育支援体制の構築 <input checked="" type="checkbox"/> 家庭教育を支援する取組 <input checked="" type="checkbox"/> 訪問型家庭教育支援活動の実施		
年間活動日数（のべ）	（ 131 日）	

家庭教育支援員や支援チームに関すること	
A：家庭教育支援チーム数	（ 1 ）チーム
B：家庭教育支援員数	（ 3 ）人
C：家庭教育支援チームや家庭教育支援員の配置場所数	（ 1 ）か所
D：前項（C）の配置場所名	（ 甲西中学校 ）

■ 活動の具体的内容

○訪問型家庭教育支援の実践等

本校の家庭教育支援は、3人のスタッフが各々地域の家庭へ個別対応をする形で連携している。3人のスタッフは、小学校の家庭教育支援員も兼ねており、小学校、学童保育からのつながりで、生徒とも保護者ともつながっていて、家庭にも入り込めるという強みがある。

本校では、不登校生徒の増加が非常に大きな問題となっており、年間30日以上の不登校生徒は、令和3年度は35人、令和4年度は53人、令和5年度は12月現在で50人である。この不登校生徒の対応に担任は苦勞していたが、家庭教育支援員の訪問が大きな力となっている。他の誰も会えない生徒に出会って無事を確認したり、児童館などに誘い、家から連れ出し、一緒に活動をしたという働きもしている。

○家庭教育支援チームの設置、実践等

令和4年度からは、「ポレポレサポート」として活動開始。学校、学年部やSSW、市の家庭児童相談室などの関係機関とも連携している。

日々の連絡は、家庭教育支援員が書く連絡ノートや職員室に来て担任や学年の教員と話すことで行っている。連絡ノートは、家庭教育支援員が訪問での本人、保護者、家庭の様子などを書き、担任⇒学年主任⇒教育相談担当⇒管理職と回覧して情報共有している。また、家庭教育支援員が教員業務支援員を兼ねていることで学校に出入りがしやすく、教員も支援員の顔を見ると最近の様子を伝え合ったりして情報共有することができている。また、ケース会議に入ってもらう場合もあり、担任があまり会えない生徒や家庭の情報を聞いたり、次回の会議までに担任とは違う立場で動く計画を立てたりすることができている。久しぶりに登校する生徒のケアを担任と協力しながら行い、生徒と保護者を精神的に支えている事例もある。

○学習講座・保護者に対する情報提供等

不登校生徒、学校への行きづらさを感じている生徒やその保護者対象に研修会を行った。主に、不足しがちな進路に関する情報の提供をした。特に、通信制や定時制の高等学校など、全日制以外の高等学校の情報提供に力を入れている。

令和4年度は、教頭が全日制以外の高等学校についての説明会を行った。学年全体に対して行う進路研修は多くが全日制のものであるので、それ以外の情報をあまり知らなかった生徒や保護者に好評であった。

令和5年度は、7月6日に本校の会議室で大津清陵高等学校馬場分校、綾羽高等学校の先生に来ていただき、各学校の定時制や通信制の説明をしていただいた。それぞれに熱のこもったお話をしていただき、特徴や学校生活の実際、学習へのフォロー体制、進路先などについて説明を聞いた。

参加者は10名、保護者だけの家庭もあれば、生徒とともに参加した家庭もあった。研修会後には、高校の先生方に個別で非常に熱心に質問する姿が見られ、関心の高さがうかがわれた。



【進路研修会で提供した資料】

■ 実施に当たっての工夫

○小学校の支援員が兼務していることで、小学校入学から中学校卒業までの9年間を通した見守りを可能にしている。

○家庭教育支援員と教員業務支援員を兼務することで、学校への出入りがしやすくなり、教職員との関係も作りやすくなっている。

■ 事業の成果

○小学校から中学校卒業までの9年間の支援体制ができた。

○保護者との信頼関係を継続することで、生徒との関係も深まった。

■ 事業実施上の課題

○家庭教育支援員は、長年学童保育等で働いている方が多く、家庭との連携も密に取れているが、若手を育成し、引き継いでいくことも考える必要がある。

報告書記入者（ 家庭教育支援員、教頭 ）